

「黄金の冬ごもり」

福島第一聖書バプテスト教会

牧師 佐藤彰

まさか、人生にこのような日があるとは思いませんでした。9年前、東日本大震災時地震、津波、原発事故に遭遇し故郷を追われた私たちは、それでも、震災直後の日曜日を除けば、礼拝を欠かすことはありませんでした。

しかし今回のコロナ災禍では、教会堂はあるのに、教会員はそこにいるのに、礼拝できないという悔しさをかみしめています。最後となった4月12日の礼拝で、私は思わずことばがつまって祝祷ができませんでした。震災で生き延びた教会は、コロナで力尽き、最後の砦と思った礼拝もかなわず、敗残兵が倒れたように思ったのです。翌19日の礼拝は、3人の牧師が誰もいなくなった礼拝堂にひっそりと集い、やむなくyou tube礼拝を配信しました。(視聴可)

けれども気がつけば、初代教会も迫害の中で、そして今日の中国の教会も共産主義体制の下、やむなく家で礼拝をささげています。この機会はもしかしたら、神様がくださった原点回帰の時でしょうか。私たちは震災の時のように、今礼拝や交わりが決して当たり前ではないことを、つくづく思い知らされています。

そう言えば地球も今、コロナで人間の活動が停止して、貴重な癒しの earth day を迎えているそうです。大気汚染のPM2,5は劇的に下がり、ガンジス河もきれいになったとか。

また、必要は新たなアイデアを生み出します。震災時、私たちはバラバラになった教会員を何とか繋ごうと、ネットで礼拝の配信を始めました。ちょうどその頃スマホが急速に普及し、今回のスムーズなコロナ対応ネット配信礼拝につながりました。そして今回はどうでしょう。いつの間にか増えてしまった会議の整理や、時代に即さなくなった慣例の見直し、ほんとうに大切なものの確認などは、コロナ後の新たな世界を生き抜く、サバイバル教会に脱皮する第一歩です。

9年前の大震災は、私たちから多くのものを奪いました。けれども、結果は移住地での新たな教会づくりでした。寝る場所や食べる物確保に右往左往した当時を思うと、今回は住まいや教会は奪われていません。私たちは、大丈夫です。「わたしの前で静まれ」(イザヤ41:1)と語られた主とふたりきりで、黄金の冬ごもりの季節を過ごしましょう。

春は来ます。苛立ちや不安を手玉に取り、信頼や寛容を育て、来るべきコロナ後の世界への旅支度を始めるのです。

主は人の子らを、ただ苦しめ悩まそうとは、思っておられない。 哀歌3章33節